

Literary reading と surface information recalling の関係に関する一考察 —Written mode の focus on form に向けて—

西原貴之

広島大学大学院 takayuki@hiroshima-u.ac.jp

キーワード : literary reading、surface information recalling、focus on form

1. はじめに

Long (1991)をその始まりとして、言語学習における focus on form の有効性が実験により示されてきた (e.g. Doughty and Varela 1998)。しかし、多くの研究は spoken mode であり、日本というコンテキストに直接応用することは難しいように思える。Henrichsen (1989)や Ozasa (2001)が指摘するように、日本ではその歴史的、文化的要因が口頭英語中心の外国語教授法の定着を妨げてきている。口頭英語の普及に努めると同時に、Fotos (1998)が言うように、われわれは written mode の focus on form を引き起こす方法を模索していく必要がある。そこで本研究では、literary reading がそのような方法の1つになりうるとして実験を行った。

2. 用語の定義

Literary reading とは、テキストに明示的に示されていないもの (例えば多重的な意味など) があるということを期待して、それらを探し出すために普段よりも言語形式に着目し、積極的に曖昧性を生成する読みである (これは Meutsch and Schmidt (1985)に準ずる)。Literary reading を行うと読むスピードは遅くなる。

Surface information とは、ある意味内容を伝えるために使われていた言語表現の情報である。

Focus on form とは言葉の意味を理解していく中で、付随的に言語形式に着目をさせることである。

3. 先行研究

Empirical Studies of Literature (ESL) は、読者の literary reading process の解明を目指してきた。その一連の研究の中で、literary reading を行うと、読者はテキストの surface information をよりよく記憶にとどめるということが示されてきた。例えば、Zwaan (1993)は、あるテキストを半分の被験者には新聞であると提示し、もう半分の被験者には文学作品であると提示したところ、後者の被験者は前者に比べて surface information recalling の成績がよかったとしている。同様な報告は Hanauer (1998)でもなされている。

4. 仮説

これらの研究は母語でなされたものであるが、もしこれが外国語であっても生じるのであれば、written mode の focus on form を引き起こす方法を模索していく上で有益である。そこで本研究では、日本人英語学習者は、英語のテキストを読む場合であっても literary reading を行い、そ

の結果 surface information recalling の結果がよくなるという仮説のもとに実験を行った。

5. 研究手法

実験参加者は国立大学において英語教員免許状取得を目指す主に大学3年生84名（男23名、女61名）であった。実験は2週にわたり、両方に参加した者62名（男14名、女48名）を分析対象とした。1週目は予備実験であり、その結果から surface information recalling task の成績において等質な2集団を作り、2週目に行った本実験において集団ごとに異なるタスクを行ってもらった。実験はすべてあらかじめ用意しておいた冊子にしたがって行った。用いたテキストは3つあり、1つは予備実験で、残りの2つは本実験で用いた。それぞれ「予備実験用テキスト」（語数：194、段落数：3、文数：22、Flesch-Kincaid Grade Level：3.9）、「テキストA」（語数：197、段落数：3、文数：20、Flesch-Kincaid Grade Level：3.8）、「テキストB」（語数：195、段落数：3、文数：22、Flesch-Kincaid Grade Level：3.9）と呼ぶこととする。また、それぞれのテキストのクローズ・バージョン（4語に1語単語が抜いてある）を作り、それを文ごとに分け、ランダムに配列したものを準備した。クローズ・バージョンはいずれも50点満点とした。また、分析はすべて、独立した2集団の平均値の差の検定（*t*検定）を行った。

予備実験では、他に特別なタスクを要求しない状態で、被験者の surface information recalling task における彼らの能力を調べた。予備実験の手順は以下の通りである。

表1： 予備実験の手順

①	実験参加の承諾を得て、これから行う実験の手順、内容を一通り伝える。
②	テキストのテーマと、読んだ後にテキストのクローズ版の空欄を埋めてもらうということ指示を与える。
③	被験者は予備実験用テキストを読む。(3分)
④	被験者は何もせずにそのまま待機する。(3分)
⑤	Surface information recalling. 被験者はテキストのクローズ・バージョンを与えられ、空欄を埋める。テキストの文の順序は入れ替えてある。(7分)
⑥	アンケートに答えてもらう。

本実験ではテキストを読んだ後3分間であるタスクを行ってもらい、その後 surface information recalling task を行ってもらうことになっていたのので、ここでは何もタスクをしない状態での3分後の surface information recalling task の結果をもとに等質な2集団を準備した ($t=0.14$, $p=.16$)。それぞれグループ1（男6名、女26名、計32名）、グループ2（男8名、女22名、計30名）と名付けた。

本実験の手順は表2の通りである。Meutsch (1986)を参考にし、literary reading の操作的定義を文字通り以上の意味を模索する読み方とし、この効果を見るために対立的な読み方として、文字通りの意味のみに注意を向けさせる読み方を行ってもらった。

表2： 本実験の手順

	グループ1	グループ2
①	実験参加の承諾を得て、これから行う実験の手順、内容を一通り伝える。	実験参加の承諾を得て、これから行う実験の手順、内容を一通り伝える。
②	テキストのテーマと「このテキストの文字通り以上の意味を読み取ってください」という指示を与える。	テキストのテーマと「テキストの内容を理解し、日本語で要約をしてください」という指示を与える。
③	被験者はテキストAを読む。(3分)	被験者はテキストAを読む。(3分)

④	被験者は読み取った意味を日本語で書く。(3分)	被験者はテキストの内容の要約を日本語で書く。(3分)
⑤	Surface information recalling. 被験者はテキストのクローズ・バージョンを与えられ、空欄を埋める。テキストの文の順序は入れ替えてある。(7分)	Surface information recalling. 被験者はテキストのクローズ・バージョンを与えられ、空欄を埋める。テキストの文の順序は入れ替えてある。(7分)
⑥	もう一度テキストAを読み、分からなかった単語に下線を引く。(1分)	もう一度テキストAを読み、分からなかった単語に下線を引く。(1分)
⑦	休憩。(1分)	休憩。(1分)
⑧	テキストのテーマと「テキストの内容を理解し、日本語で要約をしてください」という指示を与える。	テキストのテーマと「このテキストの文字通り以上の意味を読み取ってください」という指示を与える。
⑨	被験者はテキストBを読む。(3分)	被験者はテキストBを読む。(3分)
⑩	被験者はテキストの内容の要約を日本語で書く。(3分)	被験者は読み取った意味を日本語で書く。(3分)
⑪	Surface information recalling. 被験者はテキストのクローズ・バージョンを与えられ、空欄を埋める。テキストの文の順序は入れ替えてある。(7分)	Surface information recalling. 被験者はテキストのクローズ・バージョンを与えられ、空欄を埋める。テキストの文の順序は入れ替えてある。(7分)
⑫	もう一度テキストBを読み、分からなかった単語に下線を引く。(1分)	もう一度テキストBを読み、分からなかった単語に下線を引く。(1分)
⑬	被験者にアンケートに答えてもらう。	被験者にアンケートに答えてもらう。

6. 分析結果

結果は表3のようになった。Gはグループを意味する。テキストA ($t=-0.83, p=.41$)、テキストB ($t=0.71, p=.48$) 両方ともグループ間に有意差は検出されなかった。またA、Bにおけるそれぞれのタスクを合計したものにおいても有意差は検出されなかった ($t=-0.90, p=.37$)。

表3: 本実験における surface information recalling task の成績

	Text A			Text B			Total		
	G	N	M(SD)	G	N	M(SD)	G	N	M(SD)
Literary reading	1	32	29.1(7.2)	2	30	27.0(5.6)	1+2	62	28.2(6.6)
Summary	2	30	30.6(6.7)	1	32	28.3(8.1)	1+2	62	29.4(7.5)

7. 考察

本実験では、surface information recalling task における literary reading の有効性を示すことができなかった。ここでは、この実験結果について考察をしていく。

Literary reading の有効性を示さなかった原因として、最も可能性があると考えられるものにテキストを読む際に時間設定をしたことが考えられる。先行研究では時間を設定することなく実験を行っている。時間を設定したことにより、実験参加者はテキストの文字通りの意味をすばやく読み取ることに専念してしまい、結局両グループとも同じ読み方をしてしまったのかもしれない。実験参加者は、文字通り以上の意味をそれぞれが書いていたが、それらの意味はテキストを読み終わった後に推論して作られたものであり、literary reading を行った結果のものではないかもしれない。つまり、文字通り以上の意味を読み取るように指示されたグループは、時間的な制約が原因で literary reading を行わなかった可能性がある。

方法論におけるその他の可能性としては、指示に対して実験参加者が慣れていなかったこと、クローズ・バージョンにおいて順序を入れ替えたことにより実験参加者に混乱が生じたこと、クローズ・バージョンを行うと前もって知らせたことで、彼らがクローズ・バージョンをうまく遂行で

きるような読み方をしてしまったことなどが考えられる。

方法論の問題に関連して、本実験におけるクローズ・バージョンの妥当性、そして外国語というコンテキストの中で、literary reading の操作的定義が構成概念に対してどの程度妥当なものであったかという問題もある。

他には本離れが進んでいる結果、実験参加者は母語においても literary reading を行うことがないという可能性がある。アンケートで文学的なテキストをどの程度読むかを5件法で調査したところ(1が「全く読まない」であり、5が「かなり読む」である)、実験参加者の平均は2.6、標準偏差は0.79であった。この数値はから考えると、実験参加者は literary reading を行うことが最も多いと考えられる文学的なテキストをあまり読んでいないと言えるかもしれない。しかし、この可能性は推測の域を出ない。

8. 今後の課題

今後は literary reading に関して、構成概念妥当性 (Messick 1989) を更に強めていくことが必要である。妥当化のプロセスの中で、実験手順、操作的定義などを精緻化していかなければならない。また、今回の実験で1つの問題となった、テキストを読むための時間設定に関しては今後研究されていく必要がある。また母語と目標言語の対照実験もなされていく必要がある。

本実験では focus on form における literary reading の有効性を示すことは出来なかった。しかしながら、literary reading は、言葉の意味が第一の焦点である中で、付随的に言語形式に着目をさせるという focus on form に重要な示唆を与えることが可能であると考えられ、今後研究がなされていく必要がある。

参考文献

- Doughty, C. and Varela, E. (1998) Communicative focus on form. In C. Doughty & J. Williams (Eds) *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fotos, S. (1998) Shifting the focus from forms to form in the EFL classroom. *English Language Teaching Journal*, 52 (4), 301-7.
- Hanauer, D. (1998) The genre-specific hypothesis of reading: Reading poetry and encyclopedic items. *Poetics*, 26 (2), 63-80.
- Henrichsen, L. (1989) *Diffusion of Innovations in English Language Teaching: The ELEC Effort in Japan, 1956-1968*. New York: Greenwood Press.
- Long, M. (1991) Focus on form: Theory, research, and practice. In K. de Bot, D. Coste, R. Ginsberg, & C. Kramsch (Eds) *Foreign Language Research in Cross-Cultural Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins.
- Messick, S. (1989) Validity. In R. Linn (Ed) *Educational Measurement*. Macmillan: New York.
- Meutsch, D. (1986) Mental model in literary discourse: Towards the integration of linguistic and psychological levels of description. *Poetics*, 15 (3), 307-31.
- Meutsch, D. and Schmidt, S. (1985) On the role of conventions in understanding literary texts. *Poetics*, 14 (6), 551-74.
- Ozasa, T. (2001) *English Teaching Methodology in Japan: A Historical Perspective*. Hiroshima: Keisuisha.

第1日目 8月 22日 自由研究発表・第14室

Zwaan, R. (1993) *Aspects of Literary Comprehension*. Amsterdam: John Benjamins.